

51. 肝不全に対する高気圧治療の有効性について

藤原恒弘^{*1)} 難波康男^{*1)} 藤原久子^{*2)}

荻田 誠^{*3)} 吉田和正^{*3)} 大森 繁^{*3)}

$\left(\begin{array}{l} *1) \text{興生総合病院外科} \\ *2) \quad \text{同} \quad \text{透析室} \\ *3) \quad \text{同} \quad \text{高気圧治療室} \end{array} \right)$

MOF, 特に肝不全の治療法において, 各種血液浄化法に加えて高気圧治療法(HBO)が有効であった。その単独の効果を証明する目的で急性肝不全モデルについて, 病理組織的検討を行い, 昨年の本学会で発表した, いずれも実験が激症期短期間に限られ長期間の経過観察が不可能であった。今回はD-galactosamine (D.G.)の投与量を適宜減量して, 長期生存モデルについて1ヶ月間のfollow upを行ったので報告する。

【方法】実験動物, 体重1.5~2.5kgの白色雄性家兎を用い, (D.G.)初回0.5g/kg静注, 4日目に0.25g/kg追加, 11日目, 21日目に同様に0.25g/kgを追加投与し, GOT, GPT, PLTについて検討した。HBO群は投与後8時間毎に2ATA空気加圧, 100%酸素吸入を1時間行い, 行なわない対照群と比較した。又適宜灌流固定し肝・腎などについて病理組織的に検討した。

【結果】GPT: 両群共にD.G.投与後24時間でpeakに達し, 10日目には正常値に近づくが, HBO群の方が回復がより早く低値である。第2回, 第3回投与後にも同様の傾向を示したが, HBO群との較差がより大きい。

GOT: GPTと殆んど同じ傾向を示し, HBO群の方が回復は良好であった。

PLT: HBO群がより減少しない。

【病理組織像】肝については, 非HBO群では中心静脈が拡張し, 細胞質は萎縮・空胞化し, Disse腔の開大を認めた。HBO群ではこれらの所見が全て軽度である。腎についても, HBO群の方がより障害が少ない。

【結語】家兎の肝不全モデルを用いてHBOの効果を実験的に検討した結果, 生化学的にも組織学的にも有効であった。

52. 肝不全に対する高気圧酸素療法の効果

中山幸一^{*1,3)} 八木博司^{*1)} 北野正剛^{*2)}

兼松隆之^{*2)} 坂口正剛^{*3)} 奥村 恂^{*3)}

$\left(\begin{array}{l} *1) \text{福岡八木厚生会病院} \\ *2) \text{九州大学医学部第2外科} \\ *3) \text{福岡大学医学部第1内科} \end{array} \right)$

肝不全に対する高気圧酸素療法(以下OHP療法と略)の効果については, 昨年の本学会ですべてに発表した, 今回さらに症例を増やしPughの分類から肝不全に対するOHP療法の効果を検討したので報告する。

対象は, 肝不全の病歴を有する肝硬変症8例と動脈塞栓術(TAE)後肝不全を併発した肝癌3例の計11例で各種治療に著効を示さなかったものである。

使用した高気圧酸素治療装置は, 川崎エンジニアリング社製, 第2種装置で, 2絶対気圧, 80分の条件下で1日に1回, 15l/minの純酸素を高圧下でマスクを用いて吸入させ, 計20回治療した。効果判定としてPughの分類に基づき血中ビリルビン, アルブミン, プロトロンビン活性値及び脳症, 腹水などのスコアから原病のGradeを判定し, 治療前とOHP療法後とでそのGradeを比較検討した。

その結果, 治療前Grade C (poor operative risks)であった6例中, 治療後Grade A (good operative risks)になったもの1例, Grade B (moderate operative risks)になったもの2例で, 残り3例は不変であった。一方, 治療前Grade Bであった4例では, 治療後全例Grade Aとなり, 治療前Grade Aの1例は不変であったが, スコア上改善の傾向を認めた。

Grade CからAへの改善例を著効, Grade CからBもしくはBからAへの改善例を有効とすると計11例中著効1例, 有効6例, 不変4例となり, 有効率は11例中7例(63.6%)であった。

治療後の転帰について考察すると, 生存6例(2~12カ月), 死亡5例(2~11.5カ月)で, 死因は肝癌3例, 消化管出血1例, 肝不全1例であった。

以上の所見から, 我々は肝不全例に対するOHP療法は, Operative riskを改善すると共に予後の面からも肝予備能を温存する可能性が示唆され, 肝不全に対する補助療法として有用と考える。